

源氏物語講座

上卷

東京大学源氏物語研究会編



東京大学源氏物語研究会編

源氏物語講座

上卷

昭和二十四年七月十日印刷
昭和二十四年七月十五日發行

源氏物語講座
上卷檢印

定價 二百五十圓

編者

東京大學文學部
源氏物語研究會

發行者

東京都中野區千光前町一八
前田吉夫

印刷者

東京都墨島區日之出町一ノ一二九
長沼滋雄

發行所

東京都中野區千光前町一八
合資
紫乃故郷舍
振替東京四八〇二二

目次

源氏物語の風土と人間……………	久松潜一……………	一
源氏學の諸相とその系譜……………	池田龜鑑……………	三
——初期の業績を中心として——		
竝の卷の構想論的意義……………	寺本直彦……………	五
✓紫式部日記と物語……………	阿部秋生……………	八
本居宣長の源氏物語評論……………	大久保正……………	一〇
✓永遠への思慕……………	竹下數馬……………	一五
——源氏物語私觀——		
與謝野晶子と源氏物語……………	新聞進一……………	一八
源氏物語の音楽……………	吉川英士……………	一九

源氏物語の風土と人間

久
松
潜
一

一

源氏物語については種々の方面があるが、こゝでは風土と人間といふ問題を取りあげて見たい。これは自然と人といふ題に置きかへてもいいが、然しこゝでいふ風土といふのは源氏物語に現れた自然といふよりも源氏物語を形成する風土といふ意味である。もとよりそれを考察するにも主として源氏物語を通して見ることになるけれども、主題は文學形成の地盤としての風土といふ點におきたい。

二

源氏物語の風土といふ點を考へると第一に源氏物語が著された時代や著者紫式部の生活した環境としての風土を考へる必要がある。即ち平安時代は京都に都した時代であり、式部も京都を中心として生活し、源氏物語も書いたのである。もとより式部は傳記の上では長徳二年に父の爲時が越前守として任地に赴いた時、式部も越前に參つて居る。琵琶湖のそばを通り、鹽津山を越えて越前に參つて居る。紫式部家集によると

みづうみにおいつ島といふ洲崎に向ひてわらはべの浦といふ入り海のをかしきを口ずさみて

おいつ島島もる神やいさむらん浦も騒がぬわらはべの浦

とあり、また

こよみに初雪降ると書きたる日目に近き日野のたけといふ山の雪いと深う見やらるれば

こゝにかく日野の杉むらうづむらむ雪をしほの松に今やまがへる

とも記してある。琵琶湖畔で伊吹の白雪をながめて

名に高きこゝの白山ゆきなれて伊吹の嶽をなにとこそ見れ

と都近いよろこびを詠じて居る。式部は越前で年を越して歸つたと見られるが、この旅は式部の精神生活にとつて大きな影響を與へたであらう。さうして京都の風土に對して雪の深い北陸の風土との相違を感じたであらう。それは恰度萬葉集に於ける大伴家持が越中に赴任して京都の風土との相違を感じて居るにも似て居る。都で不如歸の鳴くべき時にも北越では鳴かない。都では橘の花の咲くべき時にも咲かない。そこに都の風土になれた目から見ると相違を感じるのであるが、恐らく式部もそのやうな感をいだいたであらう。それは季節のみならず、山水に於ても都との相違を感じたであらう。京都は水が豊富であるけれども山に圍まれたいはゞ山國である。これに對して越前は海岸に接した國である。いはゞ海邊の國である。而も日本海の浪荒き海にそつた土地として京都とは全く異なつて居る。このやうな點が式部にも深い感慨を與へたのであらう。式部の自然を觀照する場合にかういふ體驗は種々の影響を與へたと思はれる。

式部はこの越前の旅の外は餘り旅行はしなかつたと思はれるが、然し石山寺に參つて琵琶湖畔に宿つたことはあつたであらう。源氏物語の須磨卷をば石山寺で書いたといふ傳説もある。それはどれほど信ぜられることか分らないが、ともあれ石山寺に參つたことはあつたであらうし、また須磨明石に參つたこともあつたであらう。その他宇治をはじめ京都附近の土地には屢々參つたこともあつたと思はれる。

かういふ體驗は源氏物語を書く上に大きな影響を與へたと思はれる。そこに源氏物語に描かれた風土といふことが一方に考へられて来る。源氏物語に描かれて居る自然は人事の描寫と融合して美しい諧調をなして居ることは一般にも言はれて居る所である。式部は自然をたゞ觀察しこれを寫實的に表現するよりは、心情の世界と融合させて主觀客觀の融合した境地となつて居る。たゞ源氏物語の描いて居る土地は京都が中心であり、地方を描くことは尠い。これは平安時代物語の共通する點である。もとより宇津保物語の俊蔭の卷の如き、或は濱松中納言物語の如き遠き異域を描いて居る作品もあるけれども、それは想像によつて、もしくは文献によつて扱つたのであつて自ら土地を踏んだのではあるまい。それだけに寫實的ではない。源氏物語の中には都を中心として居るが、玉鬘卷には九州を背景に扱つて居る。夕顔と頭中將との間に出來た玉鬘が四歳の頃九州に伴はれた時の描寫に

この住む所は肥前の國とぞいひける。船子とものあら／＼しき聲にて「うらかなしくも遠くきにけるかな」とうたふを聞くまゝに二人さし向ひて泣きにけり

船人もたれをこふとか大島のうら悲しげに聲のきこゆる

來しかたも行方も知らぬ沖にいでてあはれいづくに君をこふらむ

ひなの別におのがじし心をやりていひける。金の崎を過ぎて「われは忘れず」など夜ともの言ぐさになりて彼處に参りつきてはまいて遙かなる程を思ひやりて云々

とある。「われを忘れず」とあるのは萬葉集の歌に「ちはやぶる金の御崎をすぐれどもわれは忘れじしかのすめ

神」とあるによつて居る。

全體として詳しい描寫ではなく自ら土地を踏んだ結果によつて書いたのではないことは明らかである。印象も鮮明ではない。これに比すると須磨明石の風土の描寫や宇治の山莊のあたりの描寫など式部が土地をよく知つて居て書いたと思はれ、極めて印象が鮮明であり、描寫が生きて居る。若紫の卷の北山の自然描寫なども同様である。式部が風土的に身につけてゐたのは京都の外は宇治や須磨明石や琵琶湖畔などであつたかも知れない。さういふ場所の描寫が特にすぐれて居るのも當然である。さうして式部の山と水との描寫の上から見ると、廣やかな海や水邊よりも山の描寫の方がすぐれて居つたとも言へる。これは京都が山國の都であつたことにもよるであらうし、また式部の性格が求心的な孤高な傾向を有して居たためもあるであらう。宇治に對しては式部も深い憧憬を感じてゐたではなからうか。

三

次に風土の中でも季節が源氏物語にどのやうに扱はれて居るかといふに、紫式部ほど季節の情趣を身につけて居る作家は少い。もとより季節を感覺的に鋭く把握する點では清少納言の方がすぐれて居ると言へる。枕草子の第一段にしても四季の感覺が巧みにとらへられて居る。たゞ季節の情趣になると紫式部の方がはるかにすぐれて居るやうに思ふ。紫式部日記のはじめの初秋の感を記した部分などもそれをよく示して居る。こゝには式部の季節に對する息づかひが感じられる。かういふ點は源氏物語にも同様である。

たとへば桐壺の巻をよんでゆく時、桐壺のはかない運命に同情の涙がそゞがれるが、それは人間の運命とともに秋の季節がしみ／＼と感じられるからである。更衣が世を去つてひとり佗住居をする母君を見舞に命婦を遣されるあたり心情と季節とが一になつて居る。

日は入方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、叢の蟲の聲々佗し顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり

といふ叙景にしても、その時の命婦の心持と一になつて居る。源氏物語には秋の季節を背景にして居る所が多いのを感じる。あはれ的な情趣は秋の季節の美と近いのである。須磨の巻にしてもそれである。然し他の季節の叙述も多い。花宴には春の夜の浮かれ心が朧月夜との關係ともなるのであるが、春の季節美を背景として巧みに描かれて居る。胡蝶にも春の描寫が見える。また常夏に於ける夏の描寫もその際の事件の推移とよく調和して居る。

いと暑き日東の釣殿にいでたまひて涼みたまふ。中將の君も侍りたまふ。頼しき殿上人あまた侍りて西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうのもの御前にて調じてまゐらす。例の大殿の君達中將の御あたりたづねて参り給へり。「さうさうしくねぶたかりつるをりよくものしたまへるかな」とて、大酒まゐり氷水めして水飯などとり／＼にさうどきつく／＼ふ。風はいとよく吹けども日のどかに曇なき空の西日になるほど蟬の聲などもいと苦しげに聞ゆれば、「水の上むとくなる今日のあつかはしさかな、無禮の罪は許されなむや」とて寄りふしたまへり

といふ描寫の中に、夏の暑い日のさまがよく感ぜられる。賀茂川の鮎や近き川のいしぶしなどを調理してもてなすのも夏の料理といふ感が深い。

源氏物語の季節の描寫は鋭い觀察とは言へないにしても、情趣的であり、それが事件の推移と結びついて全體の効果を與へて居る。式部は季節の中に十分ひたりきることが出來たであらう。いはゞ式部日記に於ける季節の體驗はそのまゝ源氏物語の中に現れて居るのである。

私は紫式部日記の中の師走のことを書いた文をよんで、宮廷の師走の感が實によく描かれて居ると思つて居る。

夜いたうふけにけり。御物忌におはしましければおまへにもまゐらず。心ぼそくてうちふしたるに、前なる人びとの、「うちわたりは猶いとけはひことなりけり。里にては今はねなましものを、さもいさとき靴のしげさかな」と色めかしくいひゐたるを聞きて

年くねてわが世ふけゆく風のおとに心のうちのすさまじきかな

といふ條を式部日記の巻初の「秋のけはひのたつまゝに」の條とともに最も季節感のあらはれて居るものとして愛好するが、それは源氏物語の季節感の基調をなして居ると思ふ。

四

次の問題として源氏物語に於ける人間について考察したい。源氏物語は形態からいへば長篇小説ともいへる

であらうが、他の點から言へば人間や生活描寫の文學といへるであらう。またさうした點に於て源氏物語は日本の物語や小説の上でも他を抜んだ作品であると思ふ。かつてウエリイ氏によつて源氏物語が英譯された時、ロンドン・タイムス其他に於てかなり好評を得たのであるが、その二三をかつて大和資雄氏が紹介されたことがある。たとへば

物語中の諸性格に對する紫式部の感情は纖細多様をきはめ大規模な物語においてその人物の性格や筋の構成に前後矛盾を來すことが決してなく、話術の巧妙、暢達、表現の優雅精緻、ことに心理探求の自然さ完全さにいたつては心理分析に最もすぐれた現代作家と雖もとうてい及ぶまい。

といふ如き、

玉鬘が嫁して後、しみじみと寂しさを知つて内省し始める源氏の心境、相變らず多情でありながら、次第に妻紫上になよつて來る傾向、その紫上の死を描いて徹する人間性の秘奥、これは偉大な小説の微妙な美しい翻譯である。

と云ひ、

薫大將と匂宮との對照は反省的な知性と能動的な意志との永久不變の普遍的對照である。かゝる作品は國境と時代とを超越して偉大なる藝術の普遍性をもつ。

とある如き、よくその本質を言ひあらはして居る。この事は源氏物語が近代小説の手法の上から言つても認め得ることを示して居る。

さうして源氏物語が人間を描寫して居る點では日本文學史上にも比類稀な作品であることは私どもがこの作品を通讀すれば明らかに知られる。もとより、それは平安時代的限界をもつた人間であるとも言へるけれどもなほ時代を超えた人間そのものを見ることが出来るであらう。源氏物語には源氏と、紫上、夕霧と雲井雁、薫君と宇治の大姫君等の三代にわたる世代が描かれて居り、その中に幾多の人間の生活が描かれて居る。

これを男性と女性とに分けて考へると、男性では光源氏を中心として、それに對するものに頭中將があり、光源氏の次の世代には夕霧とその友人の柏木君とがある。次には源氏の子とはなつて居るが、柏木と女三宮との間に出來た薫君とその友人の匂宮とがある。即ち三代にわたつて二人づつ友人關係が描かれて居る。光源氏と頭中將とを比べると、光源氏は理想的な人物となつて居り、容貌といひ才能といひ、情趣を解して居る點といひ、また身分と言ひ、申分のない人物である。餘り理想的に描かうとして個性が乏しいやうにも見えるが、しかし一面にはなかく意地のある所もあり、それだけ個性的の點がないではない。殊に頭中將と對比すると、頭中將が浮々した色好みの性格であるに對して源氏には一度契つた女性を捨てないといふ物がたい點もある。かういふ點で對比して居る。この對比は夕霧と柏木との性格上の對比にもなつて居る。しかしこの場合にも夕霧が後に落葉宮に心を寄せる如き、まめやかな夕霧としては常規を失して居ると見られる。柏木にしても女三宮に心を奪はれ罪を犯すのはその性格の通りであるにしても、終に罪を自覺して病んで死ぬのは源氏を恐れたためもあるが、輕薄な性格とは見られない。かういふ所にそれ／＼の特色はある。また薫君と匂宮との性格も一方が實直であり、一方が輕薄さを有して居る點には源氏と頭中將との同じ對比をなして居るが、しかし

源氏と薫君とを比較すれば世代の相違は著しく性格もまた異なつて居る點が多い。柏木と匂宮とを比較しても同様である。

ともあれ三世代によるこれ等六人の男性は源氏物語の男性の中の著しきものであり、それらに性格描寫が行はれて居り、人間が描かれて居る。その外にも桐壺帝や朱雀院をはじめ、老人としては明石入道が性格躍如として居り、また宇治八宮も不遇な中に過される人間としてよく描かれて居る。しかし全體として源氏物語は女性之作であり、従つて人間を描いても男性描寫にはどこか觀念的な所があるに對して、女性の人間描寫になると一層精細であり、迫真性もある。

もとより女性描寫にも人間の類型的なものはないではない。一の見方からすれば情中心の女性と理性中心の女性と、感情と理性との中庸を得た女性とがある。夕顔や朧月夜の内侍や、浮舟の如き何れも情を中心とする女性であり、理性に乏しい故に不幸な運命にもなつてゆく。これに對し空蟬・藤壺女御や玉葛、樺宮、宇治大姫君等は理性的な性格であり、感情を理性で抑へてゆく。殊に玉葛などは理性に勝つて情の乏しいために親みにくい感がある。空蟬や藤壺女御や宇治大姫君等は感情もあるが、それを理性で抑へてゆく所がある。明石上もどちらかと言へば理想的な女性であるが、情のうるほひもないではない。

さうして理性と感性との調和を得て居るのが紫上であり、こゝに最も理想的な女性を見ることが出来る。このやうに類型に分けてゆくことも出来るけれども、いづれの女性も個性を有して居り、生きた人間として描かれて居る。この外にも葵上や六條御息所や雲井雁や落葉宮等それらに個性的に描かれて居る。また容貌の醜

い末摘花はそのままやかな性格がをかしみの中にあはれを感じしめるし、近江君になると無教養なその性格が輕いをかしみを感じしめる。

式部は是等の女性を描くのに、その周圍にある朋輩その他の女性を観察し、これをモデルにしたこともあつたであらう。紫式部日記の中に出て来る宰相の君や小少將の君、宮の内侍、式部のおもと等の女房はそれ／＼源氏物語の女性描寫に參照されたとも見られるし、その他、觀照的な式部は自己の分身をもこの中に描いて居るであらう。しかしそれだけに源氏物語の女性がそれ／＼に人間的な生命を有して居るのである。源氏物語の中に描かれて居る女性は男性とともに平安時代の貴族生活の中に生きて居た人間である。平安時代の生活といふ限界の中に於て生きた人間像であり、また人間の理想の姿でもあつたのである。平安時代の京都中心の風土の中に生きた人間の生活をこゝに見られる。さうしてどのやうな人間にしても歴史や風土の限界の中に生きる人間であるに外ならない。今日の人間にしても何等かの限界の中に生きる人間である。従つて源氏物語の中に描かれて居る人間が平安時代の貴族生活の限界の中に生きた人間であるといふ事は却て、歴史的人間であることを示して居るのである。

さうしてそれ等の人間が單なる類型として描かれて居るのではなくそれ／＼の個性の描寫が行はれて居るのであり、その描寫の手法は近代小説の描寫にも迫るものがある。さうしてこのやうな源氏物語の中に描かれた人間には平安時代といふ歴史的制約を越えた普遍的人間性を見ることが出来るのである。今日源氏物語を讀んで共感し得るのもこのやうな時と處とを越えた普遍的な人間性を認め得るからであると思ふ。

源氏學の諸相とその系譜

—— 初期の業績を中心として ——

池
田
龜
鑑